

---

# 緋弾のエリア ~ 負完全な転生者 ~

クロス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア〜負完全な転生者〜

### 【Nコード】

N2526Z

### 【作者名】

クロス

### 【あらすじ】

もといた世界を大嘘憑きの誤作動で虚構してしまった球磨川禊はなぜか大嘘憑きの能力が変に使われて緋弾のアリアの世界に転生することになった。そこで球磨川は武偵神崎・H・アリアたちに出会い共に戦ったりしたりする

序章 く転生く(前書き)

書きたかったから書いてみました。

## 序章 　↳ 転生

序章 　　↳ 転生

「おい、主起きんか！起きろといったら起きんか！！」

『お母さん後五分…』

「ワシやお母さんじゃないわ」眼を開けてみると目の前にサンタさんみたいな容姿のおっさんがいた

『じゃあどちら様？』

「わしや神様じゃ」どうせ神様出てくるんだったら可愛い女神だったらよかったのに

「失礼なこと考えるなあ」どうやら自称神様（笑）は心を読めるよ  
うだ

「自称じゃないれつきとした神様じゃ」

『じゃあ神様僕が死んだんだったら、大嘘憑きで生き返るはずなんだけど』

オールフィクション

「残念ながらその大嘘憑きの誤作動のようで主のいた世界が虚構さ  
れたんじゃよ。」

『じゃあなんで僕がここにいるの？』

「大嘘憑きの能力が変に使われて転生するようじゃよ」

『じゃあ、めだかちゃん達は死んじゃったの？』

「……………」自称神様（笑）が黙ったということは死んだのだろう

『どこに転生するの？いちご100%？それともT O L o v e r？』

「いや、緋弾のアリアじゃ」

『緋弾のアリアってあのラノベの？』

「そうじゃ、それで危ないから武器をやるうごんなのがいい？」よ  
かったあたりだ

『じゃあ威力の高い銃二丁で』

「威力が高かったらそのぶん反動が重いぞ」

『大丈夫、反動を虚構するから』

「じゃあ、パイファー・ツェリスカ二丁でいいか」そのパイファー  
なんとかを渡してきた

『うん、ありがとう。あ、あと学校は東京武偵高で学年とクラスは、  
キンジ君達と同じ2年A組でよろしく』

「わかった。そうしておこう。あ、あと履歴は適当にたてておいた

から、一応書類を渡しておこう」書類を渡してきた

一般高からの転校生だって、しかも学力が低すぎる失礼だなあ

『後ネジもちょうだい』

「ほい、あと、緋弾のエリアに関しての記憶を消しておくからの  
ネジを渡してそうだった

『まあ仕方ないよね、ネジありがとう。この学ランのままでもいい  
ようにしてよ』

「しょうがないその学ランを防弾にしないと、あとは主だけ特別と  
いうことにおこうかのう。家については書類にかいておいたか  
らのう」

「そろそろ時間じゃ。くれぐれも世界を虚構せんでくれよ」

『楽しみだなあ』そう言ったところで真っ暗になり意識がぶっ飛んだ

「……………さらばじゃ 球磨川楔」

第一弾 〓学校までの出来事〓（前書き）

球磨川さんは一応性格を戦拳後能力が戦拳前ということにして  
くださいm(〓)m

## 第一弾　　＼学校までの出来事＼

第一弾　　＼学校までの出来事＼

『転生できたのかな？』回りを見渡すと道路の真ん中にいた

『ここどこ？とりあえず書類を読んでみよう』手に持っていた書類を見ると

主の行くことになる学校は辺りに見える学校じゃとか書いている

『……………辺りにって…ここ体育倉庫の中なんだけど…………』とりあえず外に出てみると

『あれ？こっちに何か飛んできてる？』紙飛行機みたいなのが飛んできたしばらく見てみると

『うわ！パラグライダーだし人が乗ってる！』とりあえず体育倉庫に戻るとそれもついてきてしまった

『ど、どうしよういきなりピンチだ』とりあえず横に移動すると

ドシャーン、と音をたてパラグライダーが墜落した

『…まあいいや、僕には関係ないし。そんなことよりも学校にいかなきゃ。』

体育倉庫から出てさっき見えた学校みたいな建物の方に歩いていった



『あれが学校じゃなかったらどうしよう。記憶を消されたせいで位置がわからないじゃないか』

自称神様（笑）についての愚痴を言いながら歩いていると、何か変な乗り物が10台きた

『この世界って変な乗り物があるんだなあ。』　『そういうときいきなり変なのについていた銃が発砲した』

『え!?!』

銃弾にいきなり頭を貫かれて死んだ。するとすぐに大嘘憑きが発動して生き返った

『すごく痛い。とりあえず体育倉庫に逃げよう』

走って体育倉庫に戻ると、途中にまた撃たれて死んで生き返った。

『そついや僕も銃を持っているんだっ』

そう言っつて学ランのポケットの中からパイファーなんか（以後パイファー）を取り出した。

『反動が大きいんだっつっけ？大嘘憑きで反動を虚構しなきゃ』

パイファーを構えて撃った。ドガーン、すると一台の変な乗り物がスクラップになった。

『自称神様（笑）のいった通り凄い威力だ………こんなのに二丁撃った』

「最強じゃね？」

この後何回も逃げて死んで生き返って逃げながら撃って壊してを続けて残り三台になった。

体育倉庫の敷地への曲がり角のある前を見ると変な乗り物が五台こちらに向かって来ていた

『とりあえず数を減らさなくちゃ』そう言ってパイプアーをもう一丁を取り出して両方で撃った

遠くて慣れてなかったから一発外したがもう片方が当たりスクラップにした。そして体育倉庫の中に向かって走った

( いったい何回死んだんだろう )

考えながら体育倉庫の中に入った。すると……跳び箱の中に銃を変な乗り物に向かって構えている女の子がいた

「さっきからの銃声はあんたね？あんたも手伝いなさい！」ピンクのツインテールが言ってきた

『えー、せつかく逃げてきたのに？』嫌そうにいった

「その学ランあんた一般生？」

『今日から僕も武偵だよ』

「じゃあなんで防弾制服着てないのよ！」

『大丈夫、この学ラン防弾だから』

「なら戦えるわね。ちょっとあんたも戦いなさいよ！」一緒に跳び箱の中に入っていた男の人に言っていた

『君たち武偵なの？もしそうだとしたらもう始業式始まつてると思っただけ？』二人に言ってみたら

「武偵殺しに巻き込まれたんだ(のよ)！」「二人ともハモって言った

『早くあれやってよ。さっきからついてくるんだ』

「だからあんたも手伝いなさい！」銃で撃ちながら言ってきた

『この距離じゃあ弾の無駄になっちゃうよ』

するとさっきまで跳び箱の中に入っていた男の人が女の子をお姫様だっこをして出ていきなり変な乗り物に向かって銃を撃った。

すると7台の変な乗り物が壊れた。

(そんなことするんだっいたらはじめからやってくれたらいいのに)そう考えているとまた銃弾が頭を貫いて、また死んで生き返ったそれを見ていた女の子が驚いていた。

「あ、あんた今頭銃弾が貫いて……血が……なんで生きてんのよ」震える声で言ってきた

『えーと、壊してもらったし行こつと』走って逃げた

「ちょっと教えなさいよ！」その声を聞いたあともう聞こえなくな  
った。

## 第二弾 く転校く (前書き)

一応緋弾のアリアに関しての記憶を消されたので、2年A組にして  
と言ったのは覚えていません

## 第二弾 〱 転校

### 第二弾 〱 転校

あのあと遅刻して始業式に出た。一人だけ服が違うから変な目で見られた。

始業式のあとに教務科といわれる場所に行った。そこで跳び箱の中に入っていた女の子がいた。

「あ、アンタさっきのマジシャンなんでこんなところに」

『マジシャン？まあ今日から僕も武偵？になるからねえ、ここにいるのは当然だよ』

「あら、神崎さんと知り合いだったの？よかったわ球磨川君が一人ポツチにならなくて」

『いや、今朝にあっただけです。』

「私の前であんなことしておいてよく会っただけって言えるわね」  
誤解を招く言い方をするなんてひどい

「あんなことしておいて？なにをしたんですか？」先生も食いついてこなくていいのに

『いや、なにもしてませんよ』

「いっぱい出してた（血を）」いかげんに誤解を招く言い方をやめてくれないかな

「球磨川君ちよつと話さなくてはいけないようですね」

『先生誤解ですよ。出したのは血ですよ変なものは一度も出してません』

「そうですね。まあいいでしょう。さあ行きましようか」

そういうやり取りをして先生と共に割り振られたクラスの2年A組の前に来た。

「入ってきてと言つまでそこで待っててね。」先生が言ってきた

「アンタどうやってあんなマジックしたの？頭貫かれたように錯覚させてしかも上手に血も出すなんて」

『えーと、たねは教えられないよ』適当に返事をしといた

「アンタ一般高からの転校生でしょ銃弾は何を使ってんのよ？」

『確かパイファー・ツェリスカ？って名前だったと思うよ。それを二丁』

「パイファー・ツェリスカって一番威力の高い拳銃じゃないのよ。威力の高い銃はそのぶん反動が大きいよ。それを二丁ってあんたの細腕じゃあ無理よ」

『でも実際にそれで変なのを何台か壊したよ』正直に答えてみた

「嘘よそれだったら逃げてこないもの」「もういいやめんどくさいし  
「はい二人とも入ってきて」「入ってきてといわれたので僕たちは会話を止めて入った。」

先にアリアちゃんが自己紹介とベルトの返却をしてその後の騒ぎがおさまってから自己紹介をした

『はじめまして。星雲高校から転校してきた球磨川楔です。まだ学科は決めてませんこれからよろしく』

みんなが括弧？なんで学ラン？とか言っていた。

「球磨川君は神崎さんのようにリクエストとかない？」

『特にありません』

「じゃあ峰さんの隣の空いてる席に座って」「先生が指を指した席に座った

『よろしく。りこりん？』さっき自分でいってたからたぶんあつてるだろう

「えーと、楔だから…、みそぎんだ！よろしくみそぎん」変なあだ名がついてしまった。

休憩間時間に質問攻めにあった。

「なんで学ランなの？」「一応防弾だし、学ランがよかったから』



「なんで括弧？」 『括弧つけたいから』

「学科は何にするの？」 『まだ決めてないって』

「部活はするの？」 『するきなんてないよ。』

このような質問攻めに会った後すぐに学校が終わって神様に渡された書類に書かれている家についた。一応もう一人住人がいるようだからチャイムを押した。

ピンポーン……あれ？出ないからもう一度押してみた。ピンポーン ガチャッ

「誰だよ」中から今朝に跳び箱の中に入っていた男。確かキンジ君が出てきた。

『えーと、君が同居人だよ。これからよろしくキンジ君』

「ああ、転校生の……確か球磨川だったっけ同居人が来るって言うたけどお前のことだったのか。まあ入れよ」

部屋に入った。

第二弾 く転校く (後書き)

うーん、球磨川さんのキャラ崩壊の予感が!?

### 第三弾 くアリア来襲く（前書き）

うーん、塾にいくまでに急いで書いたせいか変になってる気が……  
もし変になってたら感想のところで指摘してください。編集で変えま  
す

### 第三弾　くアリア来襲く

第三弾　くアリア来襲く

「そついえばお前宛に荷物が届いたぜ」

『僕宛に荷物？』この世界に来て1日もたっていないのに誰からだろう？開けてみた

『銃弾と通帳と印鑑だ…あ、中に手紙が入ってる。』

（その銃弾は武偵弾というものの炸裂弾、閃光弾、燃烧弾じゃ、一つだけでもかなり高いから大事にするんじゃないぞ。後その通帳には2000万入ってるからそれも大事に使うんじゃないぞ。by神様）

『……………2000万って遊んで暮らせる額じゃないか。』

「2000万だと！そんな金どこでて入れたんだよ」キンジ君が聞こえたらしく言ってきた

『さあ？どうやったんだろうねえ？そんなことよりねえこの銃弾ってどんな威力あるの？』キンジ君に銃弾の詰め合わせを見せた

「なっそれ武偵弾じゃねえかよ。一般高からの転校生なのになんでそんな物騒なもんもってんだよ」

『キンジ君どれが炸裂弾で閃光弾で燃烧弾なのか教えてよ』キンジ君がため息をついてこっちに来た

「キンジでいい。えーと、これが炸裂弾、閃光弾、燃燒弾だ。」

『キンジは物知りだねえ』

「俺も強襲科の時にサンプルを見ただけだ。このくらい武偵ならみんな知ってる」

『へー僕も覚ええないとね』そのあと僕は神様に渡された書類に書かれている銃の整備というのをやった

「お前それパイファー・ツェリスカじゃねえかなんでそんなもん使ってたんだよ。」

キンジが驚いた目で見てきた。この銃ってそんなに有名なのかな

『えーと、威力が高いから使ってるんだよ』キンジがやっぱりかと呟いていた

「球磨川お前、その銃撃つてみたか？それすごい反動あるんだぞ」

『今朝に変な乗り物に向かって撃つたよ』キンジがまたしても驚いていた

「そついえば今朝に体育倉庫に逃げてきてたな銃を撃ちながら」

ピンポン、キンジがいつてる途中にチャイムが鳴った

「その時に肩壊さなかったのか？」キンジがチャイムを無視していつてきた。

『うん大丈夫だったよ（反動を虚構したから）』

ピポピンポーン、またチャイムが鳴った。

「人は見た目によらないってお前のようなヤツに言うんだろうな」

ピポピポピポピポピポピポピンポーン、また鳴った。さすがにキンジも限界らしく玄関に行った。キンジがドアを開けるとピンのツインテールをしたアリアちゃんが出た

「遅い！次はチャイムならして十秒以内に出ること！」キンジが怒られていた。

「トランク運んどきなさい」

「ねえトイレどこ？」キンジが発言するよりも早く見つけて入った。

そしてキンジがこちらを手伝ってくれといってるような視線で見えてきたから

『まだ整備の途中だし、僕には言われてないから手伝わないよ』と言った。

そしてキンジがトランクを中に入れ、僕は整備が終えて

『ねえアリアちゃん何しに来たと思う？』と聞いてみた

「全くわからん」キンジがそう言ってからアリアちゃんが出てきてこちらに来て

「アンタもいたの？なら探す手間が省けたわ。キンジ、襖アンタたちドレイになりなさい」

そうアリアちゃんが言った。

第三弾 くアリア来襲く（後書き）

それでは塾にいらつてきます



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2526z/>

---

緋弾のエリア～負完全な転生者～

2011年12月11日17時50分発行